

日本家政学会若手の会企画 パネルディスカッション

海外で学ぶ・国内で学ぶ

～留学について考える Part II～

日 時：平成 17 年 5 月 29 日（日）13 時～14 時

会 場：中村学園大学 西 2 号館 415 室

- 13:00～13:05 開会の挨拶 若手の会の紹介及びパネリスト紹介
13:05～13:10 シンポジウム
13:10～13:40 留学についてのお話
赤塚朋子先生 宇都宮大学 教育学部 助教授 【内地研修経験者】
上野顕子先生 金城学院大学 生活環境学部 講師 【海外留学経験者】
香西みどり先生 お茶の水女子大学 生活科学部 助教授 【海外研修経験者】
13:40～14:00 質疑応答・閉会の挨拶

若手の会ホームページURL

http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/

問い合わせ先

kasei_wakatenokai@yahoo.co.jp

シンポジウムに先立ちアンケートを実施しました。ご協力を頂いた先生方に心より感謝申し上げます。

日本家政学会若手の会主催

「留学経験者に聞く！」アンケート結果

*このアンケートでは、一般的な留学と研修の両方を合わせて「留学」という言葉を使用しております。

<調査方法・調査期間>

方法→スノーボールサンプリング方式による質問紙調査（主にメールでアンケート用紙を添付送信）

期間→2005 年 4 月 23 日～2005 年 5 月 26 日

<回答者数・事例数>

回答者→34名

事例数→海外留学 31事例

国内留学 7事例

回答者の専門分野→

(人)					
被服	食物	住居	家経家族	家庭科教育	その他
2	18	2	6	5	3

回答者の年齢→

(人)				
20代	30代	40代	50代	60代
1	11	14	5	3

<留学前(留学を決定するまで)のことについて>

●結果1 留学直前の身辺状況

	年齢 (事例)									計
	～19	20～24	25～29	30～35	36～39	40～44	45～49	50～54	55～	
海外	1	1	7	10	3	3	5	0	1	31
国内	0	0	0	1	1	4	1	0	0	7
	大学生	前期院生	後期院生	助手	講師	助教授	教授	会社員	その他	計
海外	1	2	2	9	2	8	2	1	4	31
国内	0	0	0	3	0	4	0	0	0	7

	結婚 (事例)		
	未婚	既婚	計
海外	19	12	31
国内	2	5	7

	子ども (事例)		
	いない	いる	計
海外	26	5	31
国内	3	4	7

	子どもの年齢 (事例)				
	未就学	小学生	中学生	高校生以上	計
海外	1	1	1	3	6
国内	1	2	2	2	7

●結果2 留学の動機について(該当人数)

<海外留学の場合>

- ・研究を発展させる、研究方法を習得する、勉強するため(12)
- ・語学力を向上させる、語学力が必要となった(授業を英語で行う、国際的な共同研究のため)(5)
- ・留学費用が得られた、留学のシステムが利用できた(4)
- ・業績や経験を積む(4)
- ・見聞・見識を広める(3)
- ・海外で仕事をしたい、海外で学生生活を送りたい(3)
- ・研究環境を変える(3)
 - ・教授、恩師からの薦め(2)
- ・以前から興味があった(2)
- ・夫も同時期に留学していた(2)
- ・海外の方が他分野の学生の受け皿が広い(1)
- ・学科からいけと言われた(1)

<国内留学の場合>

- ・研究を充実させる、勉強するため(6)
- ・学位取得(2)
- ・上司の勧め(1)
- ・勤務校の内地留学制度を利用(1)
- ・職場との両立が可能(1)
- ・勤務校の割り当てがあった(1)

●結果3 留学先の決め方について(該当人数)

<海外留学の場合>

- ・教授、上司、恩師、知人などの紹介、人づて等(13)
- ・文献、インターネットで探す、又は文献、インターネットで探して最終的に知人の紹介(4)
- ・海外の研究者に相談(学会の海外参加者に相談、主宰教授に申し入れる等)(3)
- ・研究実績や専門分野を比較検討して(3)
- ・以前留学して慣れている場所(1)
- ・治安と社会的な安定度と同分野の研究者がいる大学、学部(1)
- ・大学の姉妹校でその大学に行くプログラムがあった(1)
- ・長期の奨学金を得ることができる(1)
- ・受入れ体制がある(1)
- ・英語が通じる(1)
- ・アメリカンセンターで調べたり、ALCの会員になり調べてもらう→フルブライトの面接官に薦められた大学に出願→アクセプトされた(1)

<国内留学の場合>

- ・教授、恩師の紹介(3)
- ・母校かつ専門分野が合う(3)
- ・専門分野、研究領域が合う(2)
- ・内地留学制度が利用できる(1)
- ・勤務地に近い(1)

●結果4 なぜ、海外留学でなく国内留学に、または、国内留学ではなく海外留学にしたのか(該当人数)

<海外留学にした理由>

- ・研究したいテーマが海外にあった、海外の方が先行していた(7)
- ・海外の研究動向・研究事情を知りたい(4)
- ・語学力の向上(4)
- ・最初から海外留学の予定、国内留学については考えなかった(3)
- ・助成金・制度が海外対象だった(3)
- ・国際的視野を広げる(3)
- ・海外生活を経験したい(2)
- ・専攻や年齢から海外の方が留学しやすかった(2)
- ・国内の研究室には、夏休みや春休みなどを利用して行くことができる(1)
- ・所属研究室の教授の薦めと紹介があった(1)
- ・今後の大学運営のためにも海外の大学の現状を見ておきたかった(1)
- ・環境を変えたかった(1)

<国内留学にした理由>

- ・学位取得の関係(3)
- ・家庭や子供の事情(2)
- ・大学院進学(1)
- ・あらかじめ決まっていた(1)
- ・国内で十分に目的がかなえられる(1)
- ・過去に同僚が国内研修をしていた(1)
- ・自分の語学能力の程度から(1)
- ・海外留学のシステムが充実していなかったし、経費等の面でも難しかった(1)
- ・海外留学は順番上当面可能性がない(1)

●結果5 使用した助成金やシステム(制度等)

制度・助成金

	なし	あり	計
海外	4	27	31
国内	0	7	7

<海外留学の場合>

- ・受け入れ先の大学から給料をもらった。
- ・文部科学省在外研究員(長期若手特別枠など)
- ・日本私立学校振興・共済事業団の海外研修員
- ・文部科学省科学研究費
- ・ポスドク制度
- ・アメリカ政府のフルブライト留学制度
- ・財団奨学金(長寿科学財団奨学金、ロータリー財団の奨学金など)
- ・学内の助成金(一般研究奨励費(毎年、助手以上が申請できる学内の研究費)、後援会の補助など)

<国内留学の場合>

- ・文部科学省内地研究員制度。研修にかかる費用は、研究費で充当
- ・私学研修福祉会の国内研究員
- ・勤務先より支出される旅費のみの支給。
- ・学内規定で内地留学制度があったが、大学院の進学という特殊事例であったことから、休職は認められたが、内地留学制度にある休職中の給与は認められず1年間無給であった。
- ・大学の内地留学用の経費(滞在費と旅費、ただし実家に住んだため普通の半分程度に減額された)

●結果6 周囲の協力状況

	非常に協力的	協力的	非協力的	非常に非協力的	計
海外	17	10	1	0	28
国内	6	1	0	0	7

	非常に協力的	協力的	非協力的	非常に非協力的	計
海外	13	10	1	1	25
国内	4	2	1	0	7

	非常に協力的	協力的	非協力的	非常に非協力的	計
海外	12	10	2	0	24
国内	6	1	0	0	7

●結果7 周囲(家族や所属先など)から反対はあったか/理解を得るためにしたこと

<海外留学の場合>

- ・家族から反対されたが、自分の意志をつらぬいたため、ほぼあきらめられた。
- ・職場では、帰国後も留学前と同様に働く(退職しない)ことを約束し、目的を持って勉強に励んだ。
- ・家族は協力的であったため、まったく問題なかった。もっとも気になったのは、同僚との関係である。留学の順番や期間などは、大学内においてナーバスな問題なので。周辺の人に事前に根回しをして、協力してもらうようお願いした。運良く、おおかたの人は協力的であった。
- ・周囲からの反対はなし。理解を得るためにというよりなるべく所属先に迷惑をかけないように、学生実験の準備等に関する詳しい資料を作成し、担当の先生に渡した。
- ・申請時に、満場一致で申請が通ることはほとんど無いが、希望が強いなら、数年掛けて留学の意思をつたえ周囲の自分に対する理解を得られるように、行動していくことが大切。ただ単に、留学の申請をしても、現状の授業担当や年間行事の調整ができない限りは、実現できない。
- ・卒論生を持たないとか授業を集中にするとか、学科内の役を前もってやっておくとか。最善の努力はしました。

<国内留学の場合>

- ・所属講座から4年以上たたないと申請しないよう口頭で言われた。(5年目で申請、6年目で研修にできる)じっと耐えた。
- ・反対はありませんでした。
- ・はじめは反対もあったが、家族や所属先に何度もお願いした。また退職する場合の引継ぎ等をしっかりと。
- ・国内留学で母校に戻る時には、実家の世話になり、保育園探しや夕方のお迎えを実家の母に頼んだ。

●結果8 留学準備中で大変だったこと、困ったこと、わからなかったこと/留学前にやっておかなければならないこと、やっておいた方がよいこと

<留学準備中に大変だったこと・わからなかったこと>

- ・海外留学では、ビザの取得に関することが多くあげられた。
- ・海外、国内留学を問わず、授業を担当している場合は、1年分の授業を全部してからいくことを求められた例もみられ、その他、講義の代理依頼や卒業研究に関する指導依頼、研究の準備や計画、休暇中の手続きなど、時間的な制約もあり、体力的に苦しかったとの意見がみられた。

<留学前にやっておかなければならないこと>

- ・海外留学においては、語学、特に会話力を身につけておくことという回答が多かった。
- ・研究に関して、自分がこれまでどういう研究をしてきたのかきちんと主張できるようにしておくこと、自分の研究の方向性や身に付けたいことを明確にしておくこと、関連の論文を検索し読んでおくこと、研究の進め方、論文の書き方などの基礎を磨いておくことが大切であり、また、受入先の先生とのコンタクトをとったり、受け入れ先の状況を調べておくことも必要であるとの意見が多くみられた。
- ・留学前に、かならず日本での仕事を片付けておくべきであり、さらに、歯の治療など、体調を整えたり、体力をつけておくことも必要であるという意見があった。

自由記述<留学準備中に大変だったこと・わからなかったこと>

- ・ビザの取得
- ・思った以上にネット環境が整っていなかった。相手先からの招聘状が手違いで届いていなかった。
- ・事前に英語での交渉(滞在ビザなどの書類に手違いがあったり)をする必要があつて大変だった。
- ・大変だったとは思わないが、初めての海外だったので、自分自身がとても心配だった。
- ・留学のための準備はさほど大変ではなかったが、仕事(勤務先)をある程度片付けて、けりをつけて行かねば

ならなかったことが大変だった。

- ・留学準備中で一番困ったことは、留学候補先の見つけ方、絞り方。
- ・県立大学なので、県庁担当者からの理解、了解を得るのが大変だった。特に、留学期間について説得するのが大変だった。
- ・大学に長期研修を申し込んでもいつ番が回ってきて行けるのか分からず、計画がたてられず困った。とりあえず申請しておいた研修先を後で変更することが大変難しいことがわかったこと。
- ・1年分の授業を全部してからいくことであり、体力的に苦しかった。(当時、クラス数も学生数も学科で一番多くもっていた。)
- ・生活上のことでわからないことや一人ではたいへんなことが多かった。たとえばアパートの契約や車の購入、保険等。行く前に、大学関係者や近隣に相談できる日本人または日本語の話せる人がいるか、調べておくとよい。可能なら発つ前から連絡をとっておくとよい。もちろん、英語はできるだけ多くの機会に学んでおいたほうがよい。特にヒアリングと会話。

自由記述<留学前にやっておかなければならないこと>

- ・担当授業について集中講義、代理依頼等、卒業研究指導学生に関する指導の依頼。事前にできる研究準備。
- ・休職中の引継ぎについてしっかりしておくと思う。制度の移行期で、なかなか決まらず、授業をすべて行い、研究の準備が不十分なまま突入してしまった。研究の準備、特にスケジュールは綿密に立てておくべきであった。
- ・英会話の練習。読み書きとは違ってリスニング、スピーキングは現地にいてもなかなかわからないことが多い。英語でのコミュニケーションの力を十分つけておくこと。文系は英語力の程度と成果が比例するので。
- ・ある程度、現地に言葉を勉強してから行って良かったと思います。(完全でなくとも、話そうと努力すると好意的でした)留学前に、自分がこれまでどういう研究をしてきたのかきちんと主張できるようにしておいた方がいいと思います。英語の論文があると尚良いです。
- ・講義に参加するための十分な語学力は必要。
- ・行けば研究テーマは何とかなると思っていたが、留学先によるだろうが、そうではなかった。自分の研究の方向性や身に付けたいことを明確にしておくこと。
- ・基本的な研究の進め方。例えば、データの解釈の仕方、データについてディスカッションできる力、自分の考えを持ってそれを他人に説明できる力など。あと、海外留学の場合、英語はできるに越したことはありません。
- ・生活においては先方の国の文化や習慣を知ること。
- ・県庁所在地にある留学先の国の施設へ状況を尋ねに行ったり、ガイドブックを調べたりした。
- ・留学前に歯は必ず治療して行った方がよい。

<留学中のことについて>

●結果 9 留学期間と留学先

	留学期間 (事例)				計
	6ヶ月以下	~1年以下	~2年以下	~3年以下	
海外	7	14	6	4	31
国内	3	4	0	0	7

	留学先の国(海外留学の場合) (事例)					計	
	アメリカ	カナダ	イギリス	オーストラリア	フランス		スウェーデン
	19	6	2	2	2	1	32

●結果 10 留学中の宿泊先(住まい)

	住まい (事例)					計
	学生寮	機関所有施設	賃貸住宅	ホームステイ	その他	
海外	6	3	21	4	0	34
国内	0	0	3	0	4	7

●結果 11 離れて生活していた家族とのコミュニケーション方法

<海外留学の場合>

- ・週に1回くらい電話をしていた
- ・手紙、電話、E-mail
- ・電話、メール(現地のパソコンが日本語入力できなかったため、添付ファイルを使用したり、英語でメールのやりとりをした)、手紙
- ・電話が中心(国際電話も安価になりました)
- ・定期的にかける電話やファクシミリ(当時、まだ電子メールは普及していなかった)

(事例)			
電話	郵便	メール	その他
27	15	9	3

- ・留学へは、研究者である夫と二人で行ったため、夫婦間のコミュニケーションは問題ない。実家の両親とは、時々電話で話した。

<国内留学の場合>

- ・Eメール、電話、手紙
- ・主に電話。まだメール等がある時代ではありませんでした。
- ・できるだけ時間を作って帰る。小・中学校の長期休暇には家族が留学先に来るなど。
- ・近距離の内地留学のため、自宅から通っていたので特になし。
- ・普段はなれているので、かえって一緒に生活できた
- ・もともと別居生活のためこちらの居住地が変わったのみで変化なし。電話連絡。

●結果 12 留学中、所属先に帰ってきて仕事をしたり、留学先で所属先の仕事をするといったことがあったか

<海外留学の場合>

あった(8事例)

- ・メールで授業と会議以外は所属先の仕事をしていた。
- ・留学先で日本の仕事や、原稿書き、大学の書類をつくりました。
- ・所属先に帰ったことはないが、留学先で大学からのメールのやりとりを学生及び教員とした。学生は卒論、修論関係の内容である。

なかった(23事例)

- ・なかった。(文部省の在外研究員制度は一時帰国が許されていない)
- ・まったくない。強いて言えば、留学中に科研費の申請書類を書いたこと。
- ・いいえ。直接関係ないかもしれませんが、留学中に人に親切にと思って職場の情報を提供したり、意見を求めたりする場合がありますが、それはしないでほしい。留学中には職場のことは忘れて、研修に専念させてあげることが必要だと思います。留学中の人には、できるだけ連絡しないのがいいと思います。

<国内留学の場合>

あった(4事例)

- ・卒論学生指導のため所属先に戻った。シラバス作成等かわりのできない事務的な仕事はメールで対応した。
- ・若干ありました。主に所属先で行っている共同研究に関する仕事でした。
- ・卒業論文と修士論文の指導を行った。

なかった(3事例)

- ・所属先と上司の配慮があり、特になかった。

●結果 13 留学中の困ったこと・わからないこと／その時の相談先(人、機関など)

自由記述のまとめ

海外留学では、言葉に関して、困ったことやわからないことがあったという意見が多くみられた。特に英語圏以外の国では、まず生活に必要なものや書類を揃える際にうまく理解できず困ったようである。英語圏の国でも、電話でのやりとりは聞き取りにくく、困ったとの意見もみられた。また、外国人と共同生活していた場合は、共同生活を営む上でのマナー・ルールについて理解すべきことが多くあったようである。相談先としては、研究室の院生や研修先の教授や教員、留学中の日本人が多い。相談できる対応窓口が豊富との意見もみられ、多くの場合、相談先や助けてくれる仲間に恵まれており、相談できずに困ったことは少なかったようである。

国内留学では、困ったことなどは特になかったとの意見が多く、何かあっても研修先の教員や友人にすぐに相談できているようである。また、研究環境について困ったことがあった例がみられたが、学部長や指導教員に相談している。

自由記述<留学中に困ったこと・わからないこと(括弧内は相談先)>

<海外留学の場合>

- ・研修中は大学の宿泊施設のみでいろいろな外国人と共同生活をしたので、はじめの頃は日常生活を営む上でマナー・ルールなど理解すべきことが多く困ることもあったが、大学の国際センターの職員に相談できたので助かった。(研修先の教授、その他の教員、大学院生)
- ・到着後最初ネットの接続、電話での英語が聞き取りにくかった(日本人コミュニティの掲示板、友人)
- ・電話やテレビなど電話での申込み(アパートのマネージャー、研究室の人)
- ・スウェーデン語(研究室のスウェーデン人)
- ・英語圏でなかったこと(受け入れ機関の友人、上司)
- ・フランス語(親切な人、英語で話してくれる人)
- ・(勤務先の上司にE-mailで相談、現地でお世話くださったボスの奥さん、現地の日本人)
- ・特に思い出すほどの困難はなかった(友人や大学の相談機関に相談、あちらでは対応窓口が豊富)
- ・初めは授業が半分くらいしか分からなかった、ひたすら勉強(アメリカ人のクラスメート、自分より先に来ている)

日本人大学院生)

- ・単身だったため生活のセットアップ(同じ学科や学部の日本人や留学先の教授)
- ・アパート探しや保険、電話加入の手続き(研究室の教授や同僚たちが非常に親切で、わからないなりに、そのとき最善と思われる選択肢を示してくれた)
- ・日常生活全般に関しては、セキュリタリーが面倒を見てくれた
- ・通っていた大学の夏期プログラムの先生方や、ホームステイ先の家族(大学の事務員でもあった)、留学していた日本人の学生や、同様に留学していた外国人の学生など

<国内留学の場合>

- ・困ったことは特になかった。相談があればいつも研修先の教員たちが相談にのってくれた。
- ・研究環境について(学部長や指導教員)。
- ・現地の友人に聞いて解決した。

<留学後のこと>

●結果 14 留学の満足度

満足度	(事例)					計
	非常に満足	満足	やや満足	やや不満	不満	
海外	16	9	5	1	0	31
国内	2	2	2	1	0	7

●結果 15 留学後の研究発表の義務(論文作成・学会発表、学内報告など)

留学後の義務 (事例)

	なし	あり	計
	海外	13	15
国内	2	5	7

- ・報告書の提出(学長へ提出、助成金をもらった団体へ提出など)
- ・論文執筆(学内研究論集への掲載など)
- ・研修報告会(学内で、助成金をもらった団体でなど)
- ・学会発表(国際学会など)

●結果 16 留学後の制約(復帰後一定期間転職や退職・休職ができないなど)

留学後の制約 (事例)

	なし	あり	計
	海外	22	8
国内	6	1	7

- ・一定期間転職できない
 - ・研修終了後5年以上、常勤として勤務すること。
 - ・正式な文章等があるわけではないが、留学する前、帰ってからすぐには辞めないように(3~5年ぐらい)という旨を言われた。
 - ・退職できないという拘束は法的に、どこでも認められていないと思うが、慣習的には、暗黙の了解で各大学にあると思う。退職・休職など権利は行使できるが、その結果は、大学から留学に対して補助された経費の全額返還が義務付けられている。
 - ・転職などの制約、ただ気にしない同僚はききせず転職している。
- ・1年間博士課程へ復学

●結果 17 留学が、その後の研究・教育などにどのように役立っているか/どのように生かしているか

<海外留学の場合>

多かった回答

- ・研究の幅が広がった。視野が広がった。
- ・英語の論文をまとめることができた。英語の論文を読むようになった。
- ・物の考え方、まとめ方に役立っている。
- ・新しい研究手法や実験アイデアが得られ、新しい仕事の手がかりとなった。
- ・国際研究や海外共同研究者を得られた。
- ・国際比較ができる。
- ・キャリアアップ。

その他回答

- ・新しい日本における管理栄養士教育の内容や方針を考える上で非常に有意義だった。
- ・日本の価値の再発見、海外での研究の進め方などすべてを学びました。研究をより国際的な方向にもっていくためのすべてを学んだ。
- ・英語のテキストや外国の教授法を活用している。
- ・留学したいという学生の相談相手になっている。

- ・是非国際雑誌に投稿したいと強く思うようになりました。また、遊ぶときは大いに遊び、研究するときはするといふメリハリのある生活も大変参考になった。
- ・日本での博士後期課程への入学、研究や調査の考え方、社会の見方などに役立っていると考えられる。研究法の授業を自分が行うときにも大変役に立っている。
- ・教材や授業内容が大学での講義に役に立っている。
- ・アメリカの大学の医学部で遺伝子治療の基礎研究を行っていたので、その方面の基礎知識が増え、生命科学関係の授業に生かされた。
- ・日本のこともよく知っておくべきだとも思いました。また、言葉はできなくても、誠実であることなどは、とても大切で、それが伝われば異文化コミュニケーションは可能だということも学んだ。
- ・長く住めば住むほどその国のこと、文化、研究領域に関して知ることができるので、講義や講演においても説得力をもたせることができる。
- ・授業やゼミ(学生の立場で経験したことを、学生との対応に生かせるのが一番のメリットか)の仕方に生かせる。

<国内留学の場合>

- ・新しい研究方法・基礎知識を学ぶことができ、研究や・授業に役立っている。
- ・人脈あるいはさまざまなネットワークができた。
- ・他大学での研修体験は、研究手法、教授法、人間関係のあり方等、多面的にとらえる機会となり、その後の学生への研究教育の場面で役立っていると思う。
- ・研究面では、研究を進めていく方向(テーマ)を見つけることができた。教育面では、学生への実験実習面で指導に自信が持てるようになった。
- ・学位取得の準備。

●結果 18 留学してよかったと思うこと

<海外留学の場合>

多かった回答

- ・日本を客観的にみることができる。民族的なことも含め、人の多様性への理解など、日本内では学べないことが多い。
- ・語学力がアップした。外国人の知人がたくさんできた。
- ・雑務が無いので、自分の時間をスケジュールできる。(一日中勉強ができる。研究に没頭できる)
- ・人々の生活・食文化など研究以外の部分でも学ぶことが多かった。(異文化にふれることができた。)
- ・英語力があがった。英語でのコミュニケーションのとり方、生活スタイルなどすべてを学んだ。

その他の回答

- ・英語で論文を書いたり、報告したりすることが、それほど億劫でなくなったことも重要な点である。
- ・世界の舞台を近く感じるようになった。海外での学会参加が身近なものになったこと。
- ・心身ともにリフレッシュできたこと。
- ・人間関係はことばの上になり立つことと、ことばの問題より気持ちの問題という両面があることを実感したこと。
- ・国際学会に臆することなく出かけられるのは、留学のおかげだと思っている。
- ・研究面、生活面ともに日本の良さを認識したこと。外国人の知り合いもできたこと。
- ・できないことは自分の能力の結果であることを、自分に示すことができること。(言い訳ができない)
- ・やればできること(結局は一人で情報を集め、実行することが出来た)、他文化社会の中で自分をもつことの大切さ、留学する際は明確な目的をもっていくことの重要性、行った先では勇気を出して積極的に自分からコミュニケーションをとり、信頼してもらうことの大切さなどを学んだ。
- ・海外の研究者の日々の研究スタイルを間近に見ることが出来、日本の研究スタイルの善し悪しをも考える機会になった。

<国内留学の場合>

- ・勤務校を外から客観的にみることができるようになった。
- ・良き指導者と相談者に出会えたこと。学部を超えた学内、学科内の諸先生方、また院生・学部生等との新しい出会いがあった。
- ・研究・勉学に集中できる時間をもてたことは、研究活動を見直す良い機会となりました。
- ・研究や教育面に関する知識も深くなった。
- ・これまでの研究を見直し、今後の方向性を考える時間が持てたこと。
- ・自分が最先端から遠く離れていることを改めて認識し、それならばそれでどう研究の方針を立てて、今後の職業生活を送っていけばよいかを考えるきっかけとなった。

ダイジェスト版調査結果は以上です